

[招待論文：研究論文]

## 市民ボランティアによる子育て広場の運営 実態と継続要因

### Investigation of Actual Activities and Continuation Factors in Places of Cultural Exchange Between Parents and Children Facilitated by Citizen Volunteers

金子 仁子

慶應義塾大学看護医療学部教授

Masako Kaneko

Professor, Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University

佐藤 美樹

慶應義塾大学看護医療学部非常勤講師

Miki Sato

Part-time Lecturer, Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University

吹田 晋

慶應義塾大学看護医療学部助教

Susumu Fukita

Research Associate, Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University

三輪 眞知子

京都看護大学大学院看護学研究科教授

Machiko Miwa

Professor, Graduate School of Nursing, Kyoto College of Nursing

**Abstract:** 市民ボランティアによって行われる「子育て広場」の運営実態と、継続要因を明らかにするため、5年以上継続している8グループを対象にインタビューを行った。「子育て広場」の実施はほぼ月1回で、7～22年継続実施されており、行政から資金の支援を受けていた。「子育て広場」のボランティアは、実施の意義を感じ母親同士や子どもたちとのつながりの形成を実感していた。また、そこでは自発的な役割分担や話し合いが大切にされていた。継続要因には、資金や人手が得られており、実施者側に成果の実感があること、内発的動機付けが得られていることが関連していると考えられた。

In this research, we clarified the actual activities conducted by citizen volunteers at places for cultural exchange between parents and children, the organizers' reasons for continuation factors. We conducted an interview-based investigation on eight groups that had been active for seven to twenty-two years, and that were receiving financial support from the government. Volunteers felt that connections among mothers and between children and volunteers were being formed at these places.

They stated that the voluntary division of roles in these places. We believe the following aspects are related to the continuation factors of the organizers ability to receive funds and obtain manpower of operation feeling a sense of accomplishment, and the ability to intrinsically motivate the organizers.

Keywords: 子育て支援、ボランティアグループ、ソーシャルキャピタル、保健師  
child care, volunteer group, social capital, public health nurse

## 1 はじめに

厚生労働省から 2018 年 8 月に発表された 2017 年度の児童相談所への児童虐待の相談件数は増加の傾向が続き 13 万件を超えた。子ども虐待対応の手引きによれば、児童虐待の発生のリスク要因には、保護者側のリスク要因、子ども側のリスク要因、養育環境上の要因等があげられており、保護者側の要因には、子どもへの愛着形成が十分に行われていない、精神的な不安、育児に対する不安、育児知識や技術不足等があげられ、養育要因には経済的に不安定、親族や地域社会からの孤立があげられている。虐待発生を予防するには、リスク要因が重ならないように予防策を講じることが重要とされている（日本子ども家庭総合研究所, 2014）。

母親の子育て不安感は、「同じくらいの子どもと遊ばせる機会がない」や「同じくらいの子どもをもつ母親と話す機会がない」と関連している（手島ら, 2003）。そこで、地域においては、地域子育て支援事業として、行政主導型の子育て支援センターが始めに設立され、その後は、様々な実施主体による子育て支援がなされるようになった。「少子化社会を考える懇談会（2002）」のなかでは「従来の保育所や自治体のサービスだけでなく、子育て中の母親が集まってつくる子育てサークル等や、中・高齢者による 子育て支援活動など、草の根の NPO の動きが地域で活性化してきており、これらの間のつなぎ・連携を図っていくことが重要」とされている。2014 年に国が策定した「健やか親子 21」（第 2 次）では、基盤課題 C 「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」があげられており、国や地方公共団体による子育て支援施策に限らず、地域にある様々な NPO や民間団体、母子愛育会や 母子保健推進員等との連携を進めていくとし、目標には「妊産婦や子どもの成長を見守り、親子を孤立させない地域づくり」をあげている。

また、平成 25 年に見直された「地域における保健師の保健活動に関する指針」では、地区活動が重視され、ソーシャルキャピタル（絆）を醸成し共助・互助を推進するとされた。この互助活動は、住民による組織的努力による問題解決であり、すなわち「コミュニティ・エンパワメント」がなされることが重要なのである。

先にも述べたように、地域の母親同士、また、母子保健推進委員や民生委員等地域のボランティアが、子育てしている人達の孤立感を減少させるために、1990 年代後半から、地域において、住民自らの手でこのような子育て問題の解決をめざして子育て広場を設立してきた。子育て広場が開設されると、そこでの母親同士、母親と活動を運営しているボランティアとの関係ができ、子育て問題を解決するための一助となる。

これら子育て広場（サークル）は、長年そのまま継続しているものもあれば、NPO 法人化して地域内全域にわたって活動を展開しているものなど、その運営形態は様々である。母親ら自らが実施している育児サークルに関しての効果は、「遊びの場の確保」「気を紛らわす場」であることが確認されている（沼田, 2004）。また、育児サークルの実態については 1999 年に東京都で調べられたものがある（西山ら, 2000）。この調査では 2 年 10 ヶ月以上前から継続しているグループは 7 割であった。しかしながら、母親らが実施主体でない市民ボランティアが実施している子育て広場の状況を記述した最近の研究はない。

本研究では、先に述べたソーシャルキャピタル（絆）醸成やコミュニティ・エンパワメントの視点から、市民ボランティアが実施している子育て広場で参加メンバーが固定せず、また活動内容も対象者にあわせ流動的に行っている広場に注目したいと考える。

現在の子育てでは、孤立化の陰で子育てに不慣れな母親や子どもに気遣いが不足している母親などにより十分な養育が行われていないネグレクトがあり、心理的虐待も増加している。また、子どもにおいては、発達障害（学習面又は行動面で著しい困難を示す子ども）が普通学級に 6.5% 程度存在し、このうち行動に著しい困難を示す子どもは 3.6% と言われている（文部科学省, 2012）。したがって、これらの気になる親子が子育て広場を利用することも少なくないと思う。その時に運営側は、参加者同士がつながるためにこれら

---

の親子の特徴への配慮をした支援を行う必要がある。これらの気になる親子の支援については、保健師は早期発見から療育支援まで行っている（吉岡ら、2003；田村ら、2016）。そこで子育て広場関係者と保健師の連携も不可欠と考え、気になる親子への支援や保健師との連携についても状況を確認することが必要と考える。

子育てをしている人々の交流を目的として開かれている子育て広場（サークル）を本研究では「子育て広場」と称する。

本研究ではこの市民ボランティアが主体で子育て広場を5年以上継続運営しているグループの実施方法と、気になる親子への対応、保健師活動との関連を含め情報収集し、その中から運営実態と5年以上活動が継続している要因を明らかにしたい。

本研究から子育て広場の継続要因を明らかにし、社会的資源として重要な子育て広場に対して保健師等が行う行政からの支援方策を考える一助としたい。

## 2 方法

行政等が作成した Web ページ等の中に子育て広場や子育てサロンについて具体的な記述がみられた行政担当部署に、調査の依頼状を送った。依頼に対して承諾の意志が示された担当部署に、本研究の対象とする条件に該当する広場が存在するかを尋ね、存在する場合は担当部署から対象となる子育て広場に対して調査協力の可能性について打診してもらった。調査協力が得られることが確認できた場合、子育て広場を実施する人々に依頼状を送付した。依頼状送付後、同意が得られた場合にインタビューを実施した。

インタビューの対象は子育て広場のリーダー（1名から数名）で約40分のインタビューを行い、データを収集した。

### 2.1 本研究の対象とする子育て広場の選定条件

対象とする子育て広場の選定条件は以下の4点である。

- ・市民が運営している
- ・5年以上活動が継続している

- ・広場の参加者は登録制でなく自由参加を基本としている
- ・月1回以上広場を開催している

## 2.2 インタビュー内容

半構成的なインタビューを行った。インタビューの内容は下記の通りである。

- ・子育て広場の運営状況（回数、プログラム内容、予算、会費の有無、参加者の周知方法等）
- ・運営主体の人材構成
- ・参加者の状況（気になる子の存在、子どもへのかかわり方の気になる親の存在）
- ・子育て広場の活動を継続できている理由
- ・活動をしてきて成果と考えること（地域に対して貢献できたと考えること、子育て広場の活動成果、自分たちにとってよかったこと）
- ・保健師との連携状況（気になる事例の情報のやり取りや相談状況）

## 2.3 データ分析方法

録音したインタビュー内容を逐語録化した。逐語録の活動実施状況から、運営実態および継続要因について質的データ分析を行う。方法としては内容を文脈ごとに分け、コードをつけ、コード内容を集めてカテゴリーを作成した。分析については客観性の担保のため共同研究者と一緒に言い確認した。

## 2.4 研究倫理

対象への依頼に際しては、研究目的・方法および、調査への参加は自由意志によること、インタビューを録音させていただくこと、同意と撤回について、研究を拒否しても不利益はおこらないこと、守られるべき個人情報等について説明し、文書で同意を得た。

なお、本研究は慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会において審査を受け承認を得て実施した。

### 3 結果

調査協力がいただけることになった子育て広場は2市( $\alpha$ ・ $\beta$ )で、 $\alpha$ 市6、 $\beta$ 市2の合計8グループである(A~H)。調査に当たり個人情報にはふれないこと、地域や広場名を公開しないことを約束した。

本研究では子育てが終了した世代がボランティアとして主に運営にあっているグループについての結果を報告する。これらは地域子育て支援拠点事業の枠外で実施しているものである。

#### 3.1 市の概要と対象広場について

##### 3.1.1 $\alpha$ 市

人口約192,000人、高齢人口割合29.8%、世帯数約81,000世帯、出生数年間約1,300人であった(平成29年12月現在)。

子育て広場には、主任児童委員等が実施しているものと、大学や幼稚園、民間団体等が自主的に実施しているものがあるが、今回の調査は市民が主催しているものとしたため主任児童委員等が実施しているものを対象とし、市内24か所のうち調査に協力の意向があった6グループについて調べた。

##### 3.1.2 $\beta$ 市

人口約483,000人、高齢人口割合26.6%、世帯数210,000世帯、出生数年間約4,100人であった(平成29年12月現在)。子育て条例が平成24年から施行されている。

ボランティアが主催している子育て支援施設には、「子育て広場」があった。これは、幼児と親が自由に参加できる「ふれあいの場」であり、市内10か所で、幼稚園の余裕教室などを利用して、月2~4回程度開催していた。また、「子育てサロン」もあり、ここでは親子(0歳からおおむね3歳児と保護者)が自由に集い、交流や仲間づくりを行っていた。これらは公共施設などを活用して、各団体が月1回程度実施していた。今回の調査対象は調査日程等の関係もあり、それぞれから1グループとした。

## 3.2 実施状況（表1参照）

### 3.2.1 運営メンバーについて

α市の各々の子育て広場は主任児童委員の主体性に任せて設立され、主任児童委員が周囲の民生委員等に声をかけ実施に至っている。主任児童委員が変われば、元の主任児童委員が運営のボランティアとして残る場合もあるが、元の主任児童委員は残らず新しい主任児童委員が実施していく場合もあった。主任児童委員以外でも民生委員等も役割が変更すれば広場の運営メンバーも変わっていく場合もあった。α市のBのみ、来所者は年間登録制で、その来所者の母親の中から1年間役員をお願いし、その役員が中心になって運営するのを主任児童委員が補佐する形で行っていた。役員の選出は3月に次年度も登録予定の方の中から話し合いで決めていた。α市のB以外では運営は主任児童委員や民生委員だけではなく、ボランティアとして子育て広場に参加している人もおり、運営メンバーが不足している状況はなかった。

β市では運営メンバーはボランティアであり、設立数年後からコアメンバーにはほとんど変更がなかったが、新たにボランティアとして入ってくる人もいた。

両市とも毎回の実施時には、都合がつくボランティアが集まって実施していた。

### 3.2.2 運営費

α市では市からの委託費が全グループに2万円支給されており、各々の広場では地区社会福祉協議会や、地区民生児童委員協議会からの支援の資金を得ている場合や、歳末助け合い募金から寄付を得ている場合もあり、年間の運営費は4万円から16万円であった。Dのみ年間登録会員から年会費1,000円を徴収していた。これらの資金はおもちゃの補充や、工作等の材料費に使用されていた。

β市のGは従来の家庭教育ふれあい事業として発足し、平成19年度から市の子育て広場事業として市から年間35万円の委託費があった。遠くから通ってくるボランティアの交通費や工作等の材料費に使用されていた。Hは市からの資金援助が44,000円で、来所者から1組100円を徴収しておやつ等の材料費にあてていた。

【4. 人々をエンカレッジするアプローチ】  
 市民ボランティアによる子育て広場の運営実態と継続要因

表1 子育て広場(A～H)の概要

市	グループ	継続年数	年間回数	運営メンバー	資金・会費	プログラム内容	来所者の状況	保健師のかかわり
α市	A	15年	10月1回	主任児童委員 民生地区 ボランティア	市からの委託費、地区協会の協賛から原則無料	自由遊び中心。折り紙、新聞紙等を用いた遊び等。庭遊び、クリスマス会	1～2歳が多い。1回は数組から20組になる親子は少ない	測定・相談年2回。親が保健師と相談する場面はあり
	B	12年	19月2回	母親4人(1名が役員)、主任児童委員等が協力	市からの委託費、地区協会の協賛から年間千円(4登録)の年間登録料	プログラムあり、工作、ハロウィン、クリスマス会	年間登録50組。毎回は25組程度。地区外からの来所は断る。多動的に走り出す子の対応	測定・相談年3回。子育てについて保健師と相談あり
	C	14年	11月1回	主任児童委員、民生ボランティアの6人の協力あり	市からの委託費、地区協会の協賛から無料	自由遊び中心。芋ほり、クリスマス会	2016年に来所者が10組になり、0歳児も来所可として、現在は20組位。1歳前後が多い	年2回来所
	D	17年	10月1回	主任児童委員 民生地区 ボランティア	市からの委託費、地区協会の協賛から原則無料	毎回プログラムを検討。消防車の来訪、工作、折り紙、母のネール教室	1歳前後が多い。1回10組程度。来所者が減少(課題)。気にならない	年に2～3回来所
	E	7年	10月1回	主任児童委員 前・元主任児童委員	市からの委託助金から無料	自由遊び中心。体操、紙居等。初回別れ会に挨拶	1か月から3歳。今年度は10組(昨年比減少)。気にならない	年に4回、測定と講話。保健師の様子を聞き取った経験あり
	F	19年	11月1回	主任児童委員 民生委員	市からの委託助金から無料	毎回プログラム検討。英語、歯磨指導、指祭り等。毎月実施	20組程度(減少傾向)。初来所は0歳児が多い。気になる子は1人のみ	保健師による測定・相談年3回。来所回数が増加を市に依頼(却下)



β市	G	22年 月2 3回	32 ボランティア リーダーは 最初から。 ボランティ ア登録15人	市からの資 金(子育て 広場・幼 園活用型 して) 無料	資 育 と 自 由 遊 び 大 型 絵 本 の 読 み 聞 かせ 手 遊 び お 誕 生 日 会 。 ク リ ス マ ス 会 ・ 運 動 会	7～41年 間来所者 数104組。 多動が気 になる子 が存在。 母たちの 依存度増 加	数年に1度 相談に来 所のこと も。
	H	7年 月1 回	12 最初から の運営メン バー1人。登 録メンバー 14人。コア メンバー4 人	行政からの 資金あり 1回1家族 100円(葉 子材料費)	親子リズム 、大型絵本 等、身体計 測。身体計 測では座 談会。個別 に誘導	1回22～50 組。毎回参 加が7割近 く。気にな る子はほと んどいない	年に数回保 健師来所

### 3.2.3 プログラムの実施等

実施場所はβ市のGは幼稚園の大ホールで実施されていたが、その他は公民館等の施設で実施していた。

実施日は年間で計画されており、内容についてはα市のB・D・Fにおいては月によってプログラム内容が表1に示したとおり毎回違っていた。他のところでは自由遊びが中心で、月によって芋掘りやクリスマス会が予定されていた。

工作、おみやげの手作りおもちゃ、季節感のある模造紙や黒板の絵、お菓子などもすべてボランティアのメンバーがそれぞれの特技を活かして準備していた。大型絵本は購入か、図書館から借りてきていた。

交流の場の工夫として、初回に母親に挨拶してもらう(E)、来所者の子どもに名札をつける(A・B・C・G・H)、誕生会(B・F)を実施していた。

広報としては、これらの広場では両市ともホームページに掲載されており、ボランティアが自分たちでチラシを作成し、スーパー等に掲示したり、自治会での回覧がされていた。

研修会については、α市では主任児童委員の研修会はあるが、子育て広場関係者を対象にしたものはないということであった。β市では市や県で実施される研修会への参加経験があった。

### 3.2.4 来所者の状況

来所者はほとんどが0歳児から保育所や幼稚園に入園するまでの3歳くら

いまで、母親と一緒に参加していた。1回の参加者は $\alpha$ 市では数組から25組で、 $\beta$ 市の2グループでは時には40組から50組になることがあった。

$\alpha$ 市の駐車場がある会場では遠くからの参加者もいるとのことであった。

気になる親子の存在については、 $\alpha$ 市ではBで衝動的に走り出す子をボランティア5人で目を離さない体制で見ているとのこと、母親は保健師などにも相談をしていた。Fでも多動的な子がおり、保健師に相談を促したことがあった。 $\beta$ 市のGでは激しく動き回る子がいた場合など、市で行う教育相談を紹介していた。Hでは気になる子がいれば子育て支援センターへつなげていた。また、来所者には相談機会を知らせるために専門の相談機関のちらしを配布していた。

### 3.2.5 保健師との関係

$\alpha$ 市のすべての広場に年に数回保健師が来所し身長・体重の測定、相談の場を設けていた。子育て広場の紹介を保健師が市民にしているという回答をBから得た。Fでは保健師の来所回数・相談時間の増加を依頼したが、担当課から良い回答は得られなかったと言っていた。 $\alpha$ 市では保健師と広場関係者が子育て広場の開催時以外で会うことについての発言はなかった。

$\beta$ 市では、表1に示したように定期的ではないが広場での保健師と母親との相談機会はあった。そのほかには地区内の子育て広場や、民生委員、主任児童委員、保育所等が集まって話し合いの場が設けられており、その時に保健師に会う機会があるとのことであった。

### 3.2.6 活動の発展

$\alpha$ 市のFでは、中学校の家庭科の保育の授業に年に1回協力しているとのことであった。その内容は子育て広場の来所経験者が周囲に声をかけ、広場運営のボランティアと一緒に1日25組で3日間中学校を訪ね、1学年全員の生徒が乳幼児とふれあう機会をつくっていた。母親たち、生徒たち双方ともに好評であり、毎年、生徒たちは来てくれる乳幼児が楽しめるように、遊びの準備をしているとのことであった。

### 3.3 インタビューからわかった継続要因について

インタビュー内容を整理すると、ボランティアが成果と感じていることから考えられる継続要因と、運営上の側面から考えられる継続要因とに整理された。

#### 3.3.1 成果と感じたことから考えられる継続要因

成果と感じていることは8カテゴリー（表2参照）となった。内容は【子育て広場実施の意義の実感】【来所者の存在が励み】【プログラムを楽しむ親子が意欲の原動力】【ボランティアは喜びが大きい】【子どもとのつながり形成の実感】【母親同士のつながり形成の実感】【ボランティアと母親が顔見知り】【ボランティア同士の横のつながり形成】である。

【子育て広場実施の意義の実感】のサブカテゴリーは、《母親が子どもとの接し方を学ぶ場》、《自由に子どもを遊ばせる場としての意義》、《孤独な母親への支援としての意義》《親子と協力してふれあい授業が実施できること》であった。

【来所者の存在が励み】のサブカテゴリーは、《参加者が集まることが励み》、《毎月の継続の参加者存在》、《次に生まれた子どもたちも参加》である。

【プログラムを楽しむ親子が意欲の原動力】のサブカテゴリーは、《参加者が毎月プログラムを楽しんでいると意欲が湧く》である。

【ボランティアは喜びが大きい】のサブカテゴリーは、《参加者に接することの喜び》、《ボランティアを楽しむことが大切》、《来所者の成長に喜び》である。

【子どもとのつながり形成の実感】のサブカテゴリーは、《来所している子と顔なじみになる》、《幼稚園生・小学生から声をかけられる》、《子どもたちの成長とつながりが成果の実感》、《主任児童委員としてのかかわりに乳幼児期からのつながりがあることがよい》である。

【母親同士のつながり形成の実感】のサブカテゴリーは《母親同士の交流の場としての存在》、《母親同士のつながりの形成がうれしい》である。

【ボランティアと母親が顔見知り】のサブカテゴリーは《母親からのボランティアへの声掛け》である。

【ボランティア同士の横のつながり形成】のサブカテゴリーは《ボランティアの仲間としての結束》、《ボランティア同士の関わりが楽しい》である。

【4. 人々をエンカレッジするアプローチ】  
市民ボランティアによる子育て広場の運営実態と継続要因

表2 成果と感ることからの継続要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例
子育て広場の実施の意義の実感	母親が子どもとの接し方を学ぶ場	母親たちも子どもとの接し方をボランティアから学ぶ機会となる
	自由に子どもを遊ばせる場としての意義	自由に遊ばせることが助かるという声を母親から聞く
	孤独な母親への支援としての意義	自分も子育ての時期孤独だったので、同じような多くの母親に何かしてあげられるのではないかとと思う
	親子と協力してふれあい授業が実施できること	中学校の生徒とのふれあい授業に子育て広場の親子と一緒に協力できるようになったこと
来所者の存在が励み	参加者が集まることが励み	楽しみにしてきてくれる親子がいること
	毎月の継続の参加者存在	毎月継続して参加してくれる人がいること
	次に生まれた子どもたちも参加	2・3番目の子どもが来所するとうれしい
プログラムを楽しむ親子が意欲の原動力	参加者が毎月プログラムを楽しんでいると意欲が湧く	親子遊びを毎月行っているが楽しんで貰っているのがよいと思う エプロンシアターを注視してくれるので制作意欲が湧く
ボランティアは喜びが大きい	参加者に接することの喜び	きらきらした瞳で見ると大変だったこともほっと消える
	ボランティアを楽しむことが大切	労力的には大変だけど喜びは大きく楽しい
	来所者の成長に喜び	1期生が高校生になったと思うと感慨深い。子どもの成長はうれしい
子どもとのつながり形成の実感	来所している子と顔なじみになる	来所してくる子と顔なじみ
	幼稚園生・小学生から声をかけられる	小学校の授業参観に行くときに来ていた子が手を元気にふってくれたりしてうれしい
	子どもたちの成長とつながりが成果の実感	子どもが大きくなって地域内でつながっている感じがすることが成果
	主任児童委員としてのかかわりに乳幼児からのつながりがあることがよい	広場に来ていた子が中学生になって問題を起こしたときに（主任児童委員としてかかわる場合）顔を知っていればよいかなと思う
母親同士のつながり形成の実感	母親同士の交流の場としての存在	最初は1人でぼつんとしていた母親が何回か来た後に楽しそうに他の母親としゃべっているのを見るとよかったと思う
	母親同士のつながりの形成がうれしい	来所者同士が何人かLINEでつながっていることを知っておどろいたことがある
ボランティアと母親が顔見知り	母親からのボランティアへの声掛け	母親からお世話になりましたと声をかけられる
ボランティア同士の横のつながり形成	ボランティアの仲間としての結束	自分たちの仲間としての結束ができていく
	ボランティア同士の関わりが楽しい	ボランティア同士の関わり合いが楽しい

### 3.3.2 運営の側面から考えられる継続要因

運営上の側面からの継続要因（表3参照）は8カテゴリーに整理できた。内容は【地区内の活動継続は当然】【ボランティアの自発的な役割分担は大切】【運営では話し合いが大切】【価値観が似ている人が継続】【地域内の様々な人との協力関係が継続の秘訣】【運営上の工夫は大切】【運営条件としてプラスなこと】、【引継ぎの秘訣】であった。

【地区内の活動継続は当然】のサブカテゴリーは《活動継続は当然》《ボランティアは継続を希望》である。

【ボランティアの自発的な役割分担は大切】のサブカテゴリーは《ボランティアは得意なことを活かした役割分担》、《役割分担は自発性が大切》、《能力開発は楽しみを増加》、《会員リーダーと主任児童委員の役割分担》である。

【運営では話し合いが大切】のサブカテゴリーは《役割変更は話し合いで決定》、《気づいたことを尊重し話し合いで改善を決定》である。

【価値観が似ている人が継続】のサブカテゴリーは《趣旨が同じ人が継続》、《利用者目線を大切にする人が継続》である。

【地域内の様々な人との協力関係が継続の秘訣】のサブカテゴリーは《世代の違う人とのコミュニケーションは大切》、《様々な人々の楽しみながらの協力が継続の秘訣》である。

【運営上の工夫は大切】のサブカテゴリーは、《運営方法の簡素化が大切》、《運営の手順書作成》、《人選には口出ししない》、《来所者の状況を記録に残す》、《参加費徴収が運営のゆとり》、《子育て広場を母親への情報の周知の機会として活用》である。

【運営条件としてプラスなこと】のサブカテゴリーは、《ボランティア保険への加入》、《子ども用トイレがあり安心》《駐車場があるため遠くから来所可能》、《公的事業としての位置づけ》である。

【引継ぎの秘訣】のサブカテゴリーは、《主任児童委員同士の引継ぎはうまくいっている》、《前任者からプログラムの実施方法を学ぶ》、《楽しいから母親が役員になる》である。

【4. 人々をエンカレッジするアプローチ】  
市民ボランティアによる子育て広場の運営実態と継続要因

表3 運営上の側面からの継続要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例
地域内の活動継続は当然	活動継続は当然	地域内で継続してやってきているのでやめることは考えられない
	ボランティアは継続を希望	ボランティアは継続希望者が多い
ボランティアの自発的な役割分担は大切	ボランティアは得意なことを活かした役割分担	それぞれの得意なことがありそれを活かして役割分担をしている
	役割分担は自発性が大切	自発的に役割を担っていてうまくいっている 自分の意見から変革がなされると自発性が育ち活動に喜びを感じる
	能力開発は楽しみを増加	ボランティアの能力開発の場になっていることも楽しいことの一つ
	会員リーダーと主任児童委員の役割分担	会員は姑に役割を担っていることを知られたくないので、講師の人材探しは主任児童委員で
運営では話し合いが大切	役割変更は話し合いで決定	役割の変更についても話し合いで決める
	気づいたことを尊重し話し合いで改善を決定	新しく参加したボランティアから気づいたことを言ってもらい話し合って改善
価値観が似ている人が継続	趣旨が同じ人が継続	趣旨が違うボランティアはやめていく
	利用者目線を大切にしている人が継続	利用者目線を大切にしている人が残っている
地域内の様々な人との協力関係が継続の秘訣	世代の違う人とのコミュニケーションは大切	世代の違う人とのコミュニケーションが図れている
	様々な人々の楽しみながらの協力が継続の秘訣	自治会・民生委員など社協とか労力的に協力してくれること 人々が楽しんで協力してくれることが続けられる秘訣
運営上の工夫は大切	運営方法の簡素化が大切	継続には運営方法の簡素化も大切
	運営の手順書作成	誰もができるようにしていくために手順書を作成
	人選には口出ししない	人選では母親たちに口出しをしない
	来所者の状況を記録に残す	来所者の状況（地区内外）を記録に残し地区内の来所者数を確認
	参加費徴収が運営のゆとりになる	市等からの委託料の他に参加費100円を徴収するようになって余裕ができた
	子育て広場を母親への情報の周知の機会として活用	必要な情報を知らせたいと思うので、相談場所や講演会等のちらしを配布している
運営条件としてプラスなこと	ボランティア保険への加入	ボランティア保険に加入している
	子どもトイレがあり安心	幼稚園なので子どもトイレがあり、安心
	駐車場があるため遠くから来所可能に	駐車場があるため遠くからも来所することができる
	公的事業としての位置づけ	公的事業の一環として行っているため来所者には安心感がある

引継ぎの秘訣	主任児童委員同士の引継ぎはうまくいっている	主任児童委員が代わる時の引き継ぎがうまくいっている感じ
	前任者からプログラムの実施方法を学ぶ	前任者の主任児童委員が工作・体操を担当し今は習っている感じ
	楽しいから母親が役員になる	母親たちは来て楽しいから役員になった

## 4 考察

今回調査した子育て広場は開設してから7年、長いところでは22年が経過していた。継続要因としては、運営基盤があること、来所者の存在、来所者確保の努力、広場の存在意義の実感、様々な人々のつながりの形成が関わっていた。また、この子育て広場の活動の中ではボランティアの自律性、関係性、有能さへの探求が満たされることで内発的動機付けがなされており、これが活動継続に関与していると考えた。

これら子育て広場のボランティアの方々と保健師との連携の密度は高いとは言いがたかったが、本研究で得られた結果から、子育て広場に対しての保健師の活動の今後の方向性について考察した。

### 4.1 継続要因

#### 4.1.1 運営の基盤

$\alpha$ 市では主に運営に関わっているボランティアは主任児童委員や民生委員であったが、これらの役割を果たしている人材が交代したとしても、広場を運営する役割も引き継がれていた。役割を引き継ぐに当たって手順書を作成しているグループや前任者からプログラムの内容を学ぶ努力をしているグループもあった。 $\beta$ 市では、開始当初からのボランティアが継続していた。したがって、運営に必要な人材が確保され、運営が引き継がれていくことも大切である。

また、8グループとも市からの資金援助がある他、 $\alpha$ 市では地区社会福祉協議会や地区民生児童委員協議会の資金援助もることが多く、会費を徴収しているところは2か所であった。運営資金の支援があることも活動継続の一助となっていると考えられる。【地区内の活動継続は当然】に示すように、

地区の組織体からの資金援助があり、市からも資金援助や市の Web ページで活動日程等が掲示される等《公的事業としての位置づけ》があり、ボランティアは活動を継続することが当然のことであると考えていた。

#### 4.1.2 来所者の存在

子育て広場では来所者が少ない時でも数組が集まり、来所者の中には継続的に参加してくれる方もいて、第1子で来所した母親が第2子、第3子を連れて来所していた。このようにボランティアは来所者が途絶えないことにより母親・子どもにとって有益な活動であると感じていた。東京都で西山ら(2000)が行った調査では、グループが解散した理由の中に、子どもの成長や人数の減少があがっていた。したがって、来所者が存在することが継続要因の一つと考えられる。

#### 4.1.3 来所者増加のための努力

各々のグループは、周知方法を工夫し、また対象年齢を変更するなど、来所者数増加の努力をしていた。プログラム内容はグループの長年の経験に基づき実施されており、B・D・Fの年間計画では夏にはプール、秋にはハロウィン、母親のためのネイル教室など、季節感や母親の要望に即したものを企画し来所者が楽しめるように工夫していた。また手作り玩具を来所者にプレゼントしたり、お菓子を食べる機会を設けたり、また、模造紙に季節の絵を描いたり、自分たちの特技を活かしつつ、来所者が喜ぶ趣向を取り入れる努力をしていた。このような工夫や努力が、親子の参加に結び付いていると考えられた。

#### 4.1.4 活動の意義を実感

ボランティアは子育て広場が母親が子どもとの接し方を学ぶ場であること、孤立している母親への支援ができていることなど、その意義を実感していることが継続要因となっていた。



#### 4.1.5 様々なつながりの形成

ボランティアは《来所者の成長に喜び》【子どもとのつながり形成の実感】に示すように、地区内で成長した子どもたちに会い、その時に子どもたちが広場に通っていたことを思い出して手を振ってくれたり、挨拶してくれたりすることに、子どもたちとのつながりを実感し喜びを感じることが、活動継続への意欲につながっていると考えられた。

現在の子育てにおいて母親の孤立は子育て不安などに影響する大きな問題である。今回調査した広場の利用者の母親たちは、【母親同士のつながり形成の実感】に示すように最初来所した時は一人で来ていても何回か参加していくうちに話す相手を見出し、そのうちに母親同士がLINEを使って連絡をとるようになり「幼稚園に行ってもまた一緒」など、継続した来所でつながりが形成されていた。そのことをボランティアは大きな成果と実感しており、これも継続要因と考える。

また【ボランティアと母親が顔見知り】に示すように、広場の来所者とボランティアが顔見知りとなり、地区内で会うと声をかけられるような関係が築かれていた。しかしながら、今回の結果からは、母親がボランティアに子育てについて相談するといったような関係には至ってはいないと考えられた。

子育て広場では来所する親子とボランティアとの関係性が築かれており、一部では「親子のふれあい事業」に発展していた。また、ボランティア同士の横のつながりも強化され、子育て広場は地区内のソーシャルキャピタルの醸成に寄与していることが確認できた。

#### 4.1.6 内発的動機付けに基づく活動の継続

調査対象の子育て広場の活動は、すべて自発性によって担保されたものであり、プログラム内容を考えたり、手順書を作成したり、自律的に運営が行われていた。その中でボランティアは得意なことを活かして役割分担を行うことで、自分の強みを実感でき、《能力開発は楽しみを増加》と能力開発へ導かれるケースもあった。先にも述べたように、この活動からボランティア同士、来所する親子、また地域内で協力してくれる自治会や社会福祉協議会との関係性が構築されていた。

---

内発的動機付けの源は、自律性への欲求、有能さへの欲求、関係性への欲求が関係しているといわれる(デシ、フラスト, 1999)。まさにこの活動は、自律性の欲求、能力開発への欲求(有能への欲求)、関係性の欲求が満たされたことにより、常に内発的動機付けがなされ、このことが活動の継続につながったと考えた。また、地域組織活動の活動継続要因の文献レビューでは、参加者側の活動状況と心情には「参加者や関係者のよい人間関係」「参加者の地域への貢献」「活動意欲」があがり、その中に「自己成長の実感」があがっていた(霜越ら, 2018)。本研究のボランティア側のインタビュー結果から示された継続要因と類似していると考えられる。

#### 4.2 これからの保健師活動への示唆

保健師は広場に出向いて、身体計測や相談を行っていたが、インタビューでは、気になる親子が保健師に相談したケースは、長年継続している子育て広場の活動の中で1回あるかないかであった。ボランティアや来所している親子と保健師の関係が深まっているとは考えられなかった。保健師は地区を担当し地区に対して責任をもって活動を推進することとなっている(地域における保健師の保健活動に関する検討会, 2013)。また個人・グループ・システムをつなぐことも役割とされている(日本公衆衛生協会, 2008)。そのため、先に示した健やか親子21の基盤課題「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」の推進者であると考えられている。自分の担当地区内の子育て広場の活動を把握し、β市で行っているような地区内での子育て支援の関係者の集まる場を設け、そこに子育て広場の関係者の参加を促すことで、子育て広場の関係者は今の子育ての状況を学び、また他の関係者との関係づくりも可能になると考える。

今回の調査では気になる親子について、子育て広場関係者と保健師とで連携して支援していたのは数例であった。保健師は気軽に子育て広場関係者との情報をやり取りすることで、支援が必要な親子を発見できると考える。

インタビューの中で発達障害を疑われるケースも数例あり、ボランティアが5人体制で見守るなど対応に苦戦している場合もあった。発達障害児への支援は保健師が普段の活動の中で行っていることなので、必要な場合は保健

師から対応方法についてアドバイスができると考える。

今回の調査では、保健師が子育て広場関係者に対して研修を実施している例はなかった。また、ボランティアには、親が不適切な養育をしている親子に広場で接した経験があるかどうかについても聞かなかった。親の不適切な養育を早期発見し、適切な支援につなげていくためには、ポピュレーションの観点から地域住民の認識を高めるアプローチが必要とされる（上田，2009）。子育て広場関係者は、子どもや親に関心が高い人々であるので、早期に支援が必要な親子にかかわれるように、親の子どもへの不適切なかわりに関する研修を行うことも保健師の役割として大切である。母子保健推進委員を対象に親子の見方に関する研修会を行った研究では、「必要な技法の理解」、「スキルアップの必要性への芽生え」が得られたと報告されている（西平ら，2015）。今回対象とした人々へこのような親子の見方の研修を行うことで、虐待予防の視点も強化され、親子を支援していくことに意欲が高まることが期待できる。

## 5 結論

$\alpha$ 市6グループ、 $\beta$ 市2グループの子育て広場（継続年数7年から22年）のボランティアへのインタビューを行った。インタビュー内容は実施状況や、来所者の状況、保健師の関わり、成果と感ずることであり、その中から運営実態と継続要因を明らかにした。

- (1) 今回調査対象の子育て広場は自発的に始まったものであり、それぞれのボランティアが自律的に役割を担い、運営上の工夫をし、一定の来場者が確保されていた。
- (2) 運営は行政からの資金の支援を礎とし、 $\alpha$ 市ではボランティアは主任児童委員の役割交代に伴って交代しても子育て広場の運営は引き継がれ、また $\beta$ 市ではボランティアを長年継続して実施しており、運営資金・運営する人手は確保されていた。
- (3) ボランティアの方々は、母親同士のつながり形成を実感し、子どもたちまた母親たちとボランティアとのつながりの形成を実感していた。子育て広場はソーシャルキャピタル醸成に寄与していると考えられた。

- (4) これら子育て広場のボランティア活動は自律性が高く、ボランティアがそれぞれ役割を果たす中で能力開発がされ、様々な人々との関係性も深まっていた。したがって、これらの活動の継続には内発的な動機づけが関連していると考えられた。
- (5) 子育て広場と保健師との関係は、有機的な連携がとれている状況とは言い難かった。今後、保健師には地区内のネットワークを強固にするための役割や、不適切な養育や、親子の関係性の見方や接し方の研修などを通して、ボランティアがさらに子育て支援の役割意識を向上させることができるようにする役割がある。

## 謝辞

本研究を行うにあたり協力いただいた市の関係者の方々、インタビューに協力いただいた市民の皆様に深く感謝いたします。

## 参考文献

- 上田礼子(2009)『子ども虐待予防の新たなストラテジー』医学書院。
- 厚生労働省(2015)「健やか親子 21」推進協議会「健やか親子 21 (第 2 次)」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf> (2018 年 9 月 11 日アクセス)
- 厚生労働省「平成 29 年度児童相談所での児童虐待相談対応件数」<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000348313.pdf> (2018 年 9 月 11 日アクセス)
- 厚生労働省(2013)「地域における保健師の保健活動に関する指針」<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000144644.pdf> (2018 年 10 月 2 日アクセス)
- 厚生労働省(2002)「少子化社会を考える懇談会」<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0318-6h.html> (2018/10/2 アクセス)
- 霜越多麻美、宮崎美砂子(2018)「地域組織活動の継続要因に関する文献レビュー：看護学等、他領域にわたる scoping review」『千葉看護学会誌』23(2), pp.1-9.
- 田村須賀子他(2016)「発達障害の可能性を危惧した「気になる子ども」と育児者に対する家庭訪問援助の特質」『日本地域看護学会誌』19(2), pp. 31-39
- 地域における保健師の保健活動に関する検討会(2013)「地域における保健師の保健活動に関する検討会報告書」。
- 手島聖子、原口雅弘(2003)「乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度開発」『福岡県立大学看護学部紀要』1(1), pp. 15-27.
- デシ, E. L., フラスト, R. 櫻井 茂男訳(1999)『人を伸ばすカー内発と自律のすすめ』新曜社。
- 西平朋子他(2015)「離島 A 市における子育て支援のための新たな地域づくり：母子保健

- 推進員の育成』『沖縄県立看護大学紀要』(16), pp. 87-95.
- 西山直美他 (2000)「東京都における子育てグループの追跡調査第2 報子育てグループとその後の活動状況について」『小児保健研究』59(1), pp. 17-24.
- 日本公衆衛生協会編 (2008)「保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会報告書」保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会.
- 日本子ども家庭総合研究所編 (2014)『子ども虐待対応の手引き』有斐閣.
- 沼田加代 (2004)「育児グループの形態別にみた育児不安と育児グループの効果に関する検討」『群馬保健学紀要』(25), pp. 15-24.
- 文部科学省 (2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf) (2018年10月2日アクセス)
- 吉岡マサ子他 (2003)「保健師はこども虐待支援にどう関わっているか」『日本在宅ケア学会誌』6(3), pp. 23-28.

〔受付日 2018. 10. 8〕